悶えのお藥

鈍子

煩悶といふと、どこやら詩的のやうにもきこえ、また或意味からは哲學や宗教の卵でも產んだやうにも聞えるのでありますが、其實は煩惱といふお目出たからぬ迷、心の糸がこぐらかつて、解くにとかれずアヽじれつたいと云ふのが抑の正体でございませう。お講義流に申しまゝと心力の統一が出來ず、理性の光明はうすらぎて、意志の力はあるやなしや、多角的なる感情のみ、蜘蛛の手をのばしたようにはびこつて居る情態、かく數學的に打算して見ると、倫理の範式にも信仰の定理にも、とてもあてはまらぬもの、所謂これ箸にも棒にもかゝらぬ代物、垣のそとになげて犬に喰はさうとしても、斑にも白にもお氣に入らぬでございませう。

さりながら人の心は幾何學の線のやうに、一々故事來歷をたどつて現はれて居るものにあらず、風邪を引いて仕舞つた子を、御前はかあさんの云ふことをきかぬからだよと、意地めて見たからとて、咳もうすらがず熱もさめまじ、なだめすかして、よい御藥をのますより外にいたしかたないではありませぬか。宗教者といふお醫者樣、さても自分勝手のことのみ、云はるゝものかな。それが迷だ迷を去れよ、夢はサッサと獏に喰はせて、冷たい水で顏洗へかしとすましこんで居るかたもあり、天のおとつさんは御救ひくだする、とやかくと思はずにお祈禱なさいとひたすらにすゝむるもございます。頓悟とやらが出來る位ならこうしては居りませぬ、このくるしさは祈禱どころの話ですか

と、病人がはからは云ひたくなるでございませう。科學でも哲學でもまた宗教でも、これを藥としてよくなりたいものだと、手をのばした時はもはや病人ではないのであります。情けなきは人間の身。そこまで心を運ぶことができずに悶え苦しんで居るのです。そこが凡夫の淺間しいところ、一体どうしたらよいでせう、この厄介ものをサ。

熟練なる母が、だッ子を取扱ふやうに、心機を飜轉せしむる因緣をつくるより外いたしかたありますまい。名醫と云はるゝ宗教者にはこの種の善巧方便中々に自在を極めて居るかたがあるさうでございますが、書物の中から顏をだして居る道學先生とか云ふ藪醫者は、病人に衞生談の押賣をするやうなもの、極めて不親切な不忠實なしかたと申さなくてはなりませぬ。つまり自分が順境にばかり居つて、人間と云ふものはどれだけ弱いものか、迷と云ふものはどれほど苦しいものか、芋の煮たほども御存知ないからでございます、經驗にとめる保姆は兒童の心理を研究するばかりでなく自分の幼き時の心的情態に遡りて比較研究をはじむるとのこと、個人や社會を教育するものも、自ら蒼龍の窟に下りて、珠をさぐる決心がなくてはならぬと思ひます。

悶えのお藥として、鈍子の印籠に貯へて居るのは色々でございます。もとより鈍子風情の持つて居るもの、世にありふれたる萬金丹のたぐひには相異ありませぬ。唯醫者のくるまでのしのぎとして、同病のかたもあらばとのおせつかいであります。大別して能動と受動との二つとしてゐます。受動といふのは外から動かされて悶えのうすらぐ

ので、いつもそんなものがあれば結好ですが、余りあてにならぬしかたでございます。しかし幸にして受動的に煩悶を救はるゝことが出來ると、他力方便まことにありがたいではありませぬか。自分の畏敬して居る人とか、自分の信頼して居る人とか、または自分の深く友愛の情をさゝげて居る人とかの言葉は、ほめらるゝはもとより叱られてもうれしく嘲られてもうち笑まるゝものでございます。

宗教で云ひますと爲人重法とか云ふのはこれでございませう。子どもがおッかさんの一ととにて、意味もなく泣きやんでニッコリすることがあるのは、この種類の萠芽でないでせうか。偉人の感化を要求するはこの爲でございます。されど受動と云ふものは、子ども的のものであります、盆栽的のものであります。廣野の一本松となりて浮世の荒い風とたゝかひ人生の酸味を實地になめ試むるには、そんな人のことをあてにして居られますまい。能動は是に於て必要となるのです。されどこれは一つの確信がなくてはいけませぬ。さもないと藥だか毒だかわからぬ事になつて仕舞ひませう。

確信といふのは、この悶が不理窟なものである、だが急には直らぬ、何とかまぎらして見やう、天神樣のお歌ぢやないがなさばなりなんだのではあるが、一寸と心機が工合が惡い、これを方便にして動かして調子を合はしたいものだとの希望でやるのであります。その方法は色々ありませうか、煩悶そのものを主觀的に見て戰ふて忘れる工夫をするのと、それを客觀的に見て批評的に考へ頭腦

を冷静にするのと、他より好因縁をつくるのとこの三種あるのです。鈍子のがらにもなき理窟をならぶるよりは、例の身の上の愚痴ものがたりすこし云つて見ませうか。

世にホームシック位不理窟なものはないのです。アメリカくんだりまで來る氣になりて多少の障害を切りぬけてやつて來てゐながら、そのふる里が逃げてなくなるものゝやうに、また自分は浦島かリップ、ヴアン、ウキンクルにでもなつたやうに、同じ地球の表面にゐながら、星界へでも島ながしになつた心、詩人の枯腸を肥すにはよいかしらぬが、あつて益なくなければ結搆、まあいやな病氣でございます。鈍子はじめはこの悶えと戰ひました。わざとはげしき勞働をして見ましたり、或は果報は寢てまてと瀬りに夢を求めて見たこともあり、むしろ煩悶に順應して見んかと故郷の寫眞をところせまきまでならべ、或は將來の希望寧ろ空想に似たることをひとり畫いて見たり、或は論理的に責めて見たり、文學的に同情をまぜて見たり讃歎したり、罵倒したり、かくして漸くその日その夜を凌いだこともございます。

また或時は批評的に自分の心を解剖して見、可愛ゆくもあり、ふびんにもあり、可笑しくもあり憎らしくもあり、これをめかたにかけ、これを切り盛りして自らなぐさめたこともあり、怒るときは鏡に對して顏面筋肉の横つまり縱のびせることを見、自ら吹きいだしたることもあり、悲む時はその情をそのまゝ筆にして、次の朝讀んで見て破つて仕舞つたこともあり、千狀萬態の妄想を超然として高みの見物したことさへあり、これもまた一

方法として弱き鈍子にはよき凌ぎかたでございました。

どうしたらこの悶えがなくなるだらうと、貯金を企てたこともあり、露の雫も歸國の費用ぞと思へば、淺はかなれど樂みにて、流石は拜金國のさすらひびと、銀貨を集めては金貨に換へ、夢想兵衞が夢みし貪慾國の亡靈のようなそぶりしたこともございます。この國の畫はがき數百枚を槐集して、歸朝の折は敎へ子だちにこれをかたり草にせんとわさりあるきし時もあり　童話の色々を集めて見たり、三十男が玩具のいろいろを携へて慈善市から歸りし時もありました。新聞雜誌の切りぬきをこしらつて見、ポンチ畫を集めて見、寫眞のいろいろを買ふて見、みなこれ心の悶えを去らふとの忘れ草とせるまでゝございました。

またある時はキャンデーの一と袋をポケットにし、ほど近き野邊にねころびて、藍より青き大空に白雲のかけるを見ながら、子どものやうにその甘きを賞玩したこともあり、當時思へらく、酒に耽り遊蕩にふけるものその動機は吾と同じきものにあらざるか、まぎらさうとした心が、ついにまぎらされて仕舞ふもの、思へば憐むべきものであるなど、世の人の爪彈するものにまで同情の涙をそゝぎたることもございます。

公園のそゞろあるき、濱邊の長騙、自働車の草駄天行、博物館の半日、日曜の圖書館などみな吾惡病を療治せんとてつくりし因緣であつたのです。

日本文字が戀しくてたまらず、座右の蟹文字が憎らしくてたまらず、さりとてお經文や祖訓をよむほどの道念にもつかまへつくことできず、電車に

のりて山家集をさぐりにでかけ、あるは白畫ベッドの中にもぐりこみて二ヶ月ばかり先の古雜誌によみふけりたることもありました。

他動的のものとしては、ほど近きに恩師の一人いらせられしため、折々は叱られにでかけ、船つくごとに必ず三通五通は手にする故郷の誰れかれの玉章、あるはこの國に於ける友どちのたよりなど、まことによき藥でありました。

他動はむしろ苦の元となること多く、恩師は今はこの國を去り歐洲を巡歷して居るため、ホームシックに加へて、まだ一ッ、想は夜な〳〵大西洋をわたりゆきまだ見ぬ山川にさまようこともございます。船つきたりと新聞にあれど郵便の來るは二三日或は四五日のあとのこと、その間のくるしさ、いつもはなつかしき配達人の、空手にしてわが門をすぎゆくを見れば、哀れその髯つちのにくらしく昔話ではないが、あの馬車の馬よ、そのまゝ斃れよかしと咀ふことさへありし、他動は妙藥ではありませぬ。

書きつらねて見ましたが、つまり妄想のわざくれ、神の愛にすがり得ず、佛の慈悲に同化し得ず、科學のたのしみも忘れ哲學の高樓を下りて、わがまゝなる遊び三昧、勝手にくるしむがよいさと云ふ人あらば理窟にはまけますがこの恨、太平洋の波と共に盡きませぬぞ。

今の世の道學先生は云ふまでもなく、情うるはしかるべき宗教者愛濃かにして方便自在なるべき筈の教育者まで、人を責むる割り合に人をなぐさめてくれず、鞭には力をこめて巧みに打てども、情けの手柔らかになでさすりてくるゝ方はすくな

く、心弱きものは自暴となり自棄となるをも顧みざる傾があるではありませぬか。

醫者のくるまでの悶えのおくすり、病人の實驗談として書いて見たまでゝでございます。ブッても死なぬと云ふ頑健の古物や、切つても血が出ぬと云ふ石頭冷情の人は御話相手ではありませぬ。況んや頓腹に百病を治すと云ふ者者婆扁鵲のエラ物は論外でございます。

（了）

端午の茅卷にかへて、こしらへて見るも興ある昔の菓子

石井泰次郎

麩餅の拵方

うどんの粉　一升　三百匁。白砂糖　一斤

百六十匁　古酒　小盃に　五杯

右の分量にて、鉢の中にて能くまぜ合せ、すり鉢にうつしてすりて、一つにとりて、蒸籠又は、こしきに入れてむす《布巾を敷て入るべし》取上てから、さまして後に切てつかふなり、

卷餅の拵方

小麥の粉に、白砂糖を合せて、水を加へてどろりとなる程に、鉢の中にてこねて、玉子燒の鍋を火にかけ、胡麻の油を入れて、鍋をあぶりて油をしみさせて、鍋の油を他の器にあけて、其あとへ、あつさ二分ぐらゐに流し入れて燒き、へらにてはがし、うらかへして、一寸あぶりて、取あげ、又一枚を流し入れてやいて、へらにて鍋のはだをかこして其まゝに置きて、黑ごまをいりたるをばらくと振かけて、前の燒たる物のこげぬ方を其ごまの方にして合せて、鍋より取上て、切方してよし、卷く時は、取あげて直にあたゝかなるうちに